

平成 19 年度生物産業インターンシップ報告書

短期大学部・生物生産技術学科

実習先：大嶋農産（茨城県筑西市 水稲・ブロイラー）

実習期間：2007 年 6 月 7 日～16 日

実習内容：

1 日目

鶏舎内給水器の清掃とビニールハウス内清掃

自動給水器の汚れをふき取った後、作動しているかの確認を行った。

終了後は、ハウス内にて田植え後の余った苗を片付けた。

2～3 日目

黒米の選別とパンフレットの修正作業

収穫した黒米から、色の付いていないものや割れている物等を取り除く作業と、大嶋農産の配布用パンフレットの修正作業を行った。

収穫した黒米に何故白い物が混ざるのかはまだ分かっていないとのことだった。



図 1：選別前の黒米

4 日目

使用済み（鶏舎）ビニールの片付け

業者による回収が可能になるよう、フォークリフトで運べる状態に折り畳み、縛る作業を行った。

午後からは雨だったため、事務所で黒米の選別を行った。

5～6 日目

事務作業と電話対応

黒米の選別と出荷用の袋作り（シール張り）を行った。

また、社長不在のため電話に対応しその旨を伝えた。

7 日目

4 日目に雨で中止したビニール片付けの続きを行った。

午後からは、邸内の土の薄い場所に土を撒き、ならした。

8～10 日目

ブロイラーの出荷作業

鶏の捕獲は業者の人が行うため、それができるよう鶏舎内の給餌装置と給水器の取り外しなどを行った。作業は鶏のおとなしい午前1時から行った。

午後は5日目と同様の事務作業を行った。

実習効果：

事務作業では、既存の枠から外れるということ、1会社としてやっていくということで増える手間と苦勞を垣間見られた。

一農家に実習に行くつもりでいたが、そこにあったのは生産・流通までを開拓している一つの会社の姿であり、勉強をさせて頂いたとまで言うのはおこがましいが、見聞きしたことは他分野でも応用の利くものであったと言える。

事務作業が思ったより多く、袋・封筒・シールに至るまで、自分でやっていくためにこれだけの仕事が増えるという事なのだ実感できたのも、応用が利く経験である。

ブロイラー関連では、生き物を育てるということ、モノを作るということは必ず元になるものが必要で、生産の現場では絶えずそれが出続け、その後処理もまた必要だということが目で見て実感できた。言ってしまうと当たり前のことだが、それを実感しにくい業種も多く、また日常生活でも忘れがちな部分であるので、ここで経験できてよかった。

自分は一次産業には就かないので、尚更である。

感想：

今回の実習では、輪を見たように思う。

1つは、穀物を食べる動物がいて、その排泄物や死骸が植物の栄養となってゆくという自然の輪である。今回見たのは鶏の排泄物を田畑の肥料にするというものだったが、それに自分は安心感のようなものを感じた。消費者の視点を持っているであろう自分が安心感を得たという事実は大きいのではないだろうか。

もう1つは人の輪である。事務所内での作業も多かったため、電話の本数や来客の数を知ることが出来、その数に驚いた。そして、来た人は仕事のようにあっても皆笑顔を浮かべていたのが印象的だった。生産の過程でも独自のこだわりを持ち、なおかつ流通までを自分（自社）で切り開いていくには、人間関係は事務的な対応だけでは決して回らないのだろうと思った。

生活面でも似たようなものを感じられた。実習生を長年にわたり受け入れ、また農大の卒業生が働いているのもあってか、着いた初日でももう他人がいるのも当たり前といった印象で、驚かされた。

その他雑感あるが、総じて一言にまとめれば、大人が夢を追っていてそれが形となしている、その姿を見せていただけたのが非常にありがたかったと思う。